

令和 4 年度 さいたま市立与野南中学校 学校だより

みなみかぜ



南風

第 7 号

令和 4 年 9 月 1 日発行

<http://yonominami-j.saitama-city.ed.jp>

<学校教育目標> 進んで学ぶ生徒 心豊かな生徒 心身共に健康な生徒

「防災の日」にあたって

校長 吉原 誠 士

学期当初に行った避難訓練の時、9月1日が「防災の日」となっている理由を尋ねたところ、ほとんどの生徒が「知らない」と回答しました。その後、大人であっても30歳前後から下の年代は怪しくなることもわかりました。確かに関東大震災は99年も前に起きたことですから、単に歴史上の出来事として認識されるようになったのは仕方ないかもしれません。しかしそうすると、単なるテスト対策の用語として気になるだけなのだろうか等々、モヤモヤした気持ちが残ります。

私が子どもの頃の東京下町には、自分が経験した大地震とその直後の大火災について語るお年寄りがたくさんいました。学校でも毎月のように机の下に入る訓練があつて、「揺れ始めは11時58分」「どこの家庭も昼食の準備をしていたから、使っていた火が燃え広がり・・・」などの話は知っていて当然という雰囲気ですらありました。災害について学ぶにあたって、当時の市民が遭遇したリアルなエピソードが加わることで、防災に努めなければならない根拠がはっきりし、当然取り組みにも力が入るようになりました。命に関わる切迫した問題と捉えるので、記憶が風化することもありません。

デジタル優位時代の若者が百科事典を手に取りながら「これはウィキペディアの紙版みたいなものです」「紙の事典は引いたことがありません」「触ったこともないです」と言うので愕然としました。「わからない時はネットで調べる」と聞くと何となくそれでいいように感じながら、自分の中に知識をストックすることを軽んじているようにも思えて心配でもあります。一つひとつの言葉の意味や由来、それにまつわるエピソードやイメージは大切なものです。そこで得た知識や理解のストックがあるからこそ、思考が成り立つのではないのでしょうか。タブレットには膨大な知識を蓄えることが可能ですが、自分の代わりに考えてはくれません。便利なAIが登場したとしても、物事の最終決断を下すためには自分の責任において頭を使わざるを得ません。これまで何度も言ってきた通り、脳に負荷をかけ、いろいろたくさん覚え、様々に想いを巡らせることが一生求められるのです。

2011年3月11日の東日本大震災について語ると、多くの人が恐怖や悲しみを同時に思い出すことでしょう。「人間には自分の心を守るために『時と共に忘れる』という機能が備わっている」と説明してくれた人がいました。完全に忘却してしまうのか、記憶が薄れてちょっとした“思い出”に過ぎなくなってしまうのか、あるいは後付けの感情や事柄が加わって全く異なったお話へと変化するものなのか・・・。反対に「苦しみは決して忘れることはない」と言う人もいます。人それぞれに苦い体験への応じ方はあるのでしょうか。しかし天災であれ人災であれ“教訓”として忘れてはならないことは、後世の人々が絶対に受け継いでいこうと決心し努力する必要があります。8月29日にNHKで「映像の世紀 バタフライエフェクト 東京 破壊と創造 関東大震災と東京大空襲」が放映されました。リアルな画像には衝撃を受けますが、これも含めて防災の日の意味を捉え直し、戒めにできるとよいと思います。